
人間発達科学 I

第7回

発達とはなにか②

(2) 発達を規定するもの

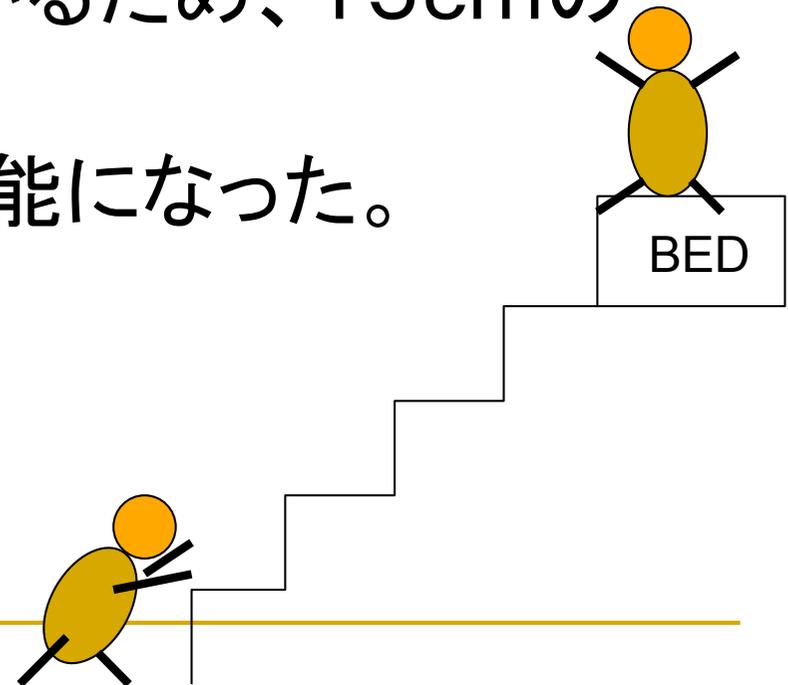
① 遺伝か、環境か？

■ 発達の二側面—成熟と学習—

- ・ **成熟**：遺伝的に決定され、経験や環境に左右されることが少ない発達の側面
ex. 男女の別、身長・体重の増加、歩行の開始・・・
- ・ **学習**：個人の特定の経験や活動によって、新知識や新活動力を獲得する発達の側面
ex. ことばの習得、水泳・・・

■ 遺伝説(生得説)

- 身分制社会の原理と親和的
- Gesell, A. L. の「成熟優位説」
 - 双生児統制法による「成熟優位」の「証明」
 - A児に、生後46～52週まで、毎日20分間、130cmの高さのベッドに上がるため、15cmの階段昇りの訓練を課した
 - 53週目には10回可能になった。
 - 訓練を受けなかったB児
 - いきなり7回できた



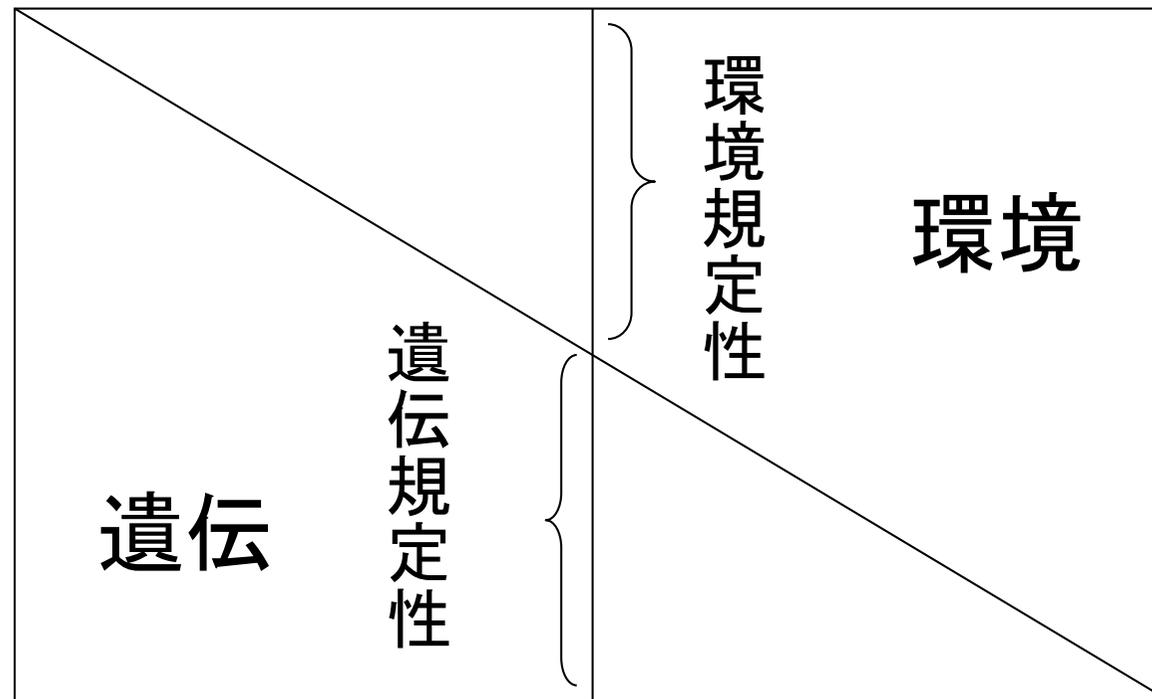
■ 環境説

- ・Locke, J. J.の「精神白紙説」
 - ・変動社会に適合的
 - ・Watson, J. B.の行動主義
 - ・「科学」としての心理学を目指して
 - ・前提としての古典的条件づけ
 - ・「アルバート坊や」の実験
 - ・行動とは刺激に対する反応の集合
-

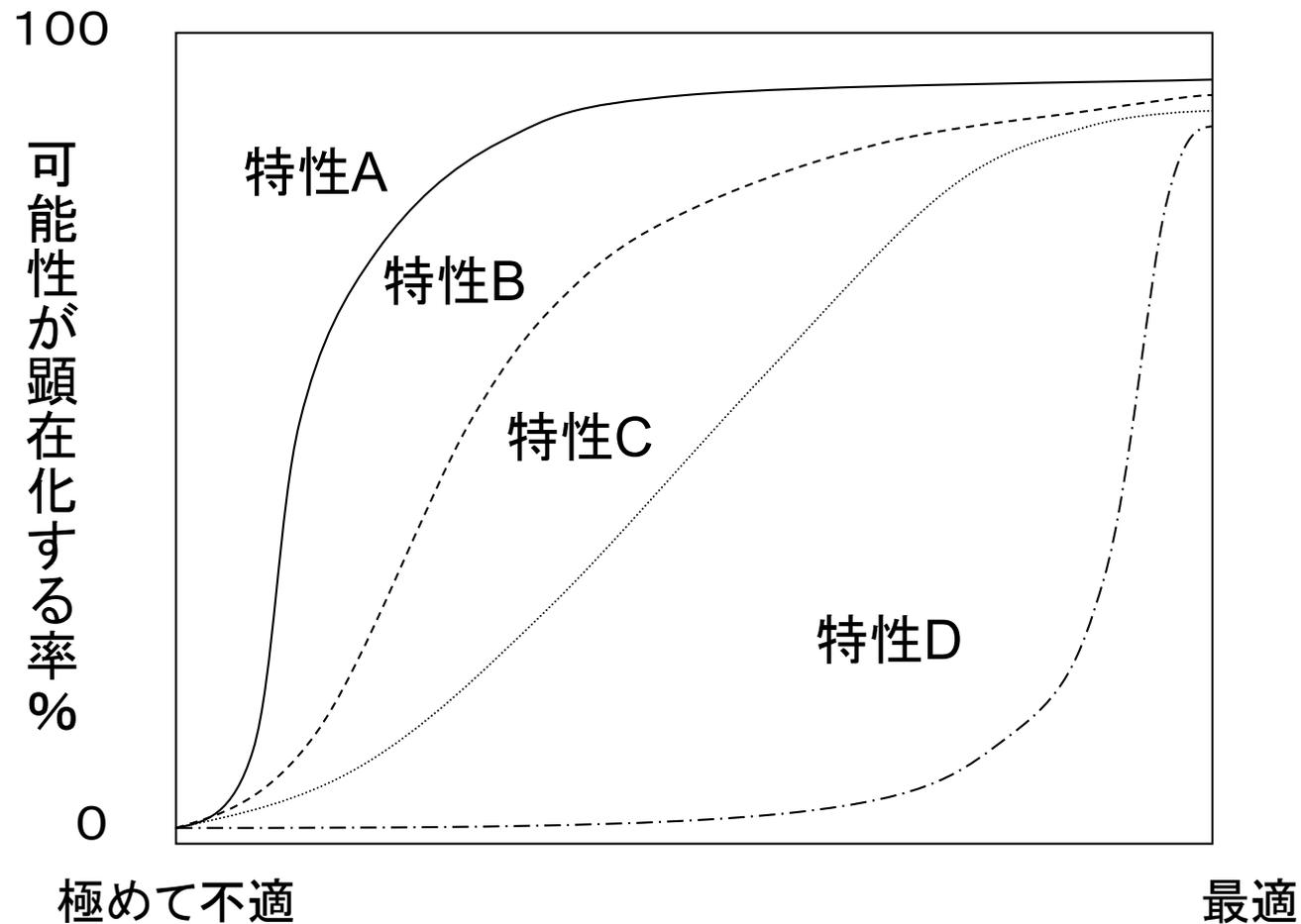
- 遺伝も環境も

- 輻輳説 (Stern, W.)

- Luxenburger の図式



■ 環境閾値説 (Jansen, A. R.)



環境条件がどの程度発達に適しているか

■ 相互作用説

- ・ 遺伝、環境は発達への前提条件に過ぎない。
- ・ 発達は環境に対して能動的にかかわり合っていく
個体と環境との相互作用による。



行動遺伝学からの批判

- ・ 遺伝が相互作用のなかでどのように作用しているか調べるべき。
-

②発達の敏感期

- 発達段階 (developmental stage)
- 発達課題 (developmental task)
 - ・ 発達の各段階で習得しなければならない、もしくは習得することが期待されている課題
- 敏感期 (sensitive period)
 - ＝ 臨界期 (critical period)
 - ・ ある学習を成功させるのに必要な身体的・精神的な諸条件が個体のなかに準備され、興味関心が高まる時期。

③臨界期をどう考えるか

■ 刷り込み(刻印づけ: imprinting)

- ・ 非常に短期間に生じる、急速な学習

(臨界期)

- ・ その効果は強固で非可逆的
- ・ 単なる個体の経験を超えた種に特有な性格
- ・ 成体の行動が出現するはるか以前に完成

by Lorenz, K.

→人間にも当てはまるのか？

■ 〈愛着〉形成における「臨界期」？

・〈愛着〉

- ・乳幼児期に作られるコミュニケーションの土台

・Spitzによる「施設病」の発見（1964年）

- モデル施設と母子寮を比較→「母子分離が原因」

・〈愛着〉形成における臨界期の強調

- 「2歳半を過ぎてしまうと、どんなに良いマザリングもほとんど意味がない」（Bowlby）

- 「母性剥奪」（maternal deprivation）

- 「愛情欠損的性格」

■ 「母性剥奪理論」の問題

- ・社会的影響＝「3歳児神話」
 - ・「母性」(ラター、1979年)
 - ・養子研究からの批判(シャプアー、2001年)
 - ・数年間、人間関係が希薄な施設の環境で育てられ、通常の〈愛着〉形成期を過ぎた子どもでも、後に養父母のもとで育てられれば〈愛着〉が形成される。
-

-
- 野生児から臨界期がみえるか？

『アヴェロンの野生児』をみてみよう。

フランソワ・トリュフォ監督
(1969年、フランス映画)

■ ゲゼル『狼に育てられた子』

・「生後5ヶ月で狼に連れ去られ(カマラ)、7歳頃、妹(アマラ)も連れてこられた。」

・「オオカミの習性」？(小原、1989年)

・オオカミの乳は脂肪分がとても濃い

・オオカミは巣を2～3週間で移動

・人間の目は構造的に光らない。

→遺棄された自閉症児 or 知的障害児では？

(鈴木光太郎、2008年)

ナマステ インド



97. 8/20

「狼（おおかみ）に育てられた少年がインドで見つかった」というニュースが世界を駆けめぐったのは、一九五四年一月だった。

「手足が退化し、四つんばいで歩く」「生肉を好んで食べる」「雄たけびも狼そっくり」といったセンセーショナルな記事が各国の新聞に載った。

日本の大学でも、幼児期の経験がその後の人生にいかほど大きな影響を及ぼすかの好例として、心理学や社会学の講義で紹介された。

ところが、インド北部にあるラクノウ大学のハリ・アスタナ教授は「少年は狼が育てたのではなく、捨てられた」と証言した。

元教授は当時、この少年に心理テストをした。おかしなところは、「騒ぎが大きくなりすぎて、本当のことを言う機会を失ってしまった」という。

もともと、この少年が発見されたのは、狼がいる森の中ではなく、ラクノウ駅構内に停車していた客車の座席の下だった。警察が衰弱しきった少年を保護し、ラクノウ市内のパルランブル病院に運んだ。「狼少年」と名付けたのは、病院の担当医師だった。

記者発表では「発見された時に汚れたシャツを着ていた」といった情報は明らかにされず、「日光を嫌い、ウオ」と叫ぶ」といった野性児ぶりだけが強調された。

「狼少年」実は列車の捨て子



病院で医師らに体を支えられながらミルクを飲む「狼少年」ハリ・アスタナ教授（右内）提供

アスタナ教授は「あの子は小児マヒだった。脳障害もあつた。物を握ることもできず、立つことも、四つんば

いになることもできなかった。狼と一緒にいたのなら、ひさやじが硬くなっていなければならぬのに、そういふこともなかったと語った。

インドの農村には、身体障害児を一族の恥と考え、捨て子にする風潮が今も残っている。当時、地方には身障者施設はほとんどなかった。現在、施設は全国に約二千あるが、推定で四百万人といわれる身障者のうち、施設にいるのは二十万人にすぎない。

元教授はいう。「あの少年は両親が薄暗い部屋でひそかに育ててきたが、治る見込みがないのに絶望して列車の中に捨てた、というのが真相だ」

発見当時、九歳前後といわれた少年は十四年後、感染症で亡くなった。

「人間社会に適應できずに死んだ」という説がまことしやかに流れた。担当医師も他界し、病院には当時の記録も残っていない。

（ラクノウ）宇佐波 雄策

『朝日新聞』1997年8月20日

• 社会的隔離児（回復良好な事例）

（内田、1999年による）

ケース	救出時の年齢	救出前の状況（救出時の状況）	言語回復結果
イザベル （アメリカ）	6歳 6ヶ月	「私生児」。母親と一室に閉じ込められる。 母は聾、身振りによるコミュニケーション活発。 （脚はクル病で歩行不能。発語なし）	きわめて良好。 1年半で回復。
P.M.と J.M. （チェコ）	6歳 10ヶ月	一卵性双生児。母は出産後死亡。乳児院 →継母。地下室に閉じ込め虐待。 父も虐待に加担。相互のやりとりは身振りで行う。 （歩行不能。靴も履けず。自発語ほとんどなし。）	8歳10ヶ月で養子に出され急速に改善。 正常の水準に戻る。

・社会的隔離児(回復不良事例)

ケース	救出時の年齢	救出前の状況(救出時の状況)	言語回復結果
アンナ (アメリカ)	6歳 0ヶ月	「私生児」。孤児院や養子先を転々。養育らしい養育は受けず。 (筋肉麻痺、栄養失調、発語なし、自閉的傾向あり)	2年後歩行するも言語は1歳程度。 回復せず10歳半で死亡。
アンヌとアルバート (アメリカ)	姉6歳 0ヶ月 弟4歳 0ヶ月	姉:一室に閉じ込められる。(身体・言語の遅滞。歩行可。排泄のしつけなし) 弟:便器つき椅子のみの狭い部屋で幼児用寝台にくくりつけられる。 (歩行困難、発語なし。排泄のしつけなし)	反響語以外の発語なし。身体発達は回復。IQは50程度。歩行改善。意味不明語多少。 他人に無関心。無感動。二人とも自閉症的障害との複合障害の疑い。

• 社会的隔離児(中間的事例)

ケース	救出時の年齢	救出前の状況(救出時の状況)	言語回復結果
ジェニー (アメリカ)	13歳 7ヶ月	20ヶ月以上納戸に閉じ込められ椅子にくくりつけ。父親、兄も虐待。騒音を嫌い、音なしの環境。母親視力弱り、父親の命令で世話せず。身振りのやりとり。 (身体発育6, 7歳程度。IQ1歳程度。発語2, 3語のみ)	発音障害と文法的側面の一部欠陥を除き回復きわめて良好。 結婚して社会復帰果たす。
FとG (日本)	姉6歳 0ヶ月 弟5歳 0ヶ月	放置。救出前1年8ヶ月間狭い小屋に閉じ込められる。排泄、風呂など世話なし。 うどんや重湯程度を時々2歳上の姉が与える程度。 (心身とも1~1.5歳程度。発語、姉2語、弟なし。)	2人とも高校卒業後、就職。 弟に言語の文法面、形式的側面の遅滞残る。